

「底が突き抜けた」時代の歩き方 537

「あの時君はバカだった」－「団塊」世代が置き去りにしてきたこと

自ら団塊世代に属する中野翠が連載エッセイ『満月雑記帳』（『サンデー毎日』04・12・5）のなかで、'60年代GS（group sounds）ブームの中心にいたザ・ゴールデン・カップスを振り返った（観ていないのでわからないが）記録映画『ザ・ゴールデン・カップス ワンモアタイム』に冒頭で触れ、この映画に登場して証言するムッシュかまやつや萩原健一、忌野清志郎、矢野顕子などのなかでジョー山中の証言が自分には《一番ウケた》と書いて、こう記している。

《ジョー山中はザ・ゴールデン・カップスと同じ横浜出身で、彼らの影響を受けて内田祐也と共にフラワートラヴェリングバンドを結成するのだが、ある日、日比谷野音で公演していたら、全共闘ばい一団が「ロック粉碎！」と叫んで乱入して来たという。

私は軽く驚いた。（へえーっ、そんなことがあったのか……バカだねー）と薄笑いが浮かんだが、ジョー山中のそのあとの一言がさらにおかしかった。「ステージこわされちゃあたまらないから、返り討ちに^{して}や^{った} - 。頭の中でだが、私、爆笑。あの頃（'70年前後？）の野放図で乱暴な空気が蘇って来る。

全共闘（？）が「ロック粉碎！」と言って暴れたなんて、今考えるとメチャクチャで、理解に苦しむところだけれど、たぶん、そのモチベーションは「あいつら、ちゃらちゃらして女にモテやがって。グヤジーッ」てなものだったんじゃない？ それしか考えられない。それで乱入したところが、待ってましたとばかりポコポコにされちゃったのね。ちゃらちゃらしている連中のほうがよっぽど強かった！》

そういうことがあったんだろうなあ、と思う。いまの言葉でいえば一種のパフォーマンスであった。当時の全共闘のイメージからすれば、充分ありえた一方的で乱暴な彼らのコミュニケーションスタイルであったのだ。

《今にして思うことだけれど、「全共闘」というのは、ある意味で、うまい装置ではあったのだ。装置なんていうのは大げさか。かくれ蓑とか吐け口と言ったほうがいいか。天下国家問題からモテるモテない問題まで、若い男の子たちの多様な屈託や過剰なエネルギーは、「全共闘運動」という名のもとに思うぞんぶん発散できたのだ。'72年の連合赤軍事件でみんなハツと正気に戻ってショボンとしちゃったわけだけど。

（…）当時盛り上がっていた「アングラ演劇」の世界でも乱入騒ぎはたびたびあったようだ。ある劇団の公演に他の劇団の人たちが殴り込みをかけちゃうの。異様な風体で場内に乱入し、おかしなパフォーマンスで芝居を妨害する。妨害されたほうも負けていない。「よおし、みんなヤッチまえ」と芝居を投げ出して殴り合い。一段落ついたとこ

ろで「さあ、さっきの続きから」なあって、芝居を再開したりして。そういうことは珍しくなかった。「面白かったなあ」と、その昔「アングラ演劇」をやっていた友人は今でも懐かしそうに言う。バカだねー。

バカだねーと言いながら、私は笑っている》

《つくづく「あの時君はバカだった」という言葉が浮かんで来る。ザ・スパイダースの「あの時君は若かった」という歌を知っている人にしか通じないダジャレだけれど。(中略)

団塊世代ほど若さとバカさをのびのびと混同できた幸せな世代はなかった。そういう意味で「あの時君はバカだった」は傑作、と私は思っているのだ。》

続いて話題のベストセラー『電車男』に話題は移り、主人公の 電車男 が《車内で酔っぱらいが女の人たちに絡んでいるのを見かねて、勇気を振り絞って止めに入る》場面について、《なぜそれだけのことをするのに勇気が要るのか不思議でたまらない。《相手の酔っぱらいは老人だというし。おそれることは何もないと思うけれど》と疑問を口にする。

《ケンカをする、人とハッキリと対立をする、肉体的にもじかに接触して敵対する - ということをして今の男の子たちは異様におそれている。まったく未経験のものとして。

30年の間に男の子もずいぶん変わってしまったものだ。世の中にとってどちらがいいのか、^{にわか}俄に判断はできないけれどね。》

男の子だけではない、30年の間にずいぶん変わったのは。女も大人も、要するに、自分以外の人々への対し方がすっかり変わってしまった。もちろん、自分自身への対し方においても変わってしまった。知らない相手とかかわることに臆病になっているから、主人公がたとえ老人の酔っぱらいであっても、注意したり止めに入るという行為そのものが大変な厄介ごとにも感じられているのだ。一つ一つの発語や行動にまるで全身に鎧を着けたかのような重さが申し掛かっているのである。この30年の間に誰もが、人や社会との関係に萎縮するようになってしまったのだ。社会の空気が希薄になり、人が吐く呼吸も希薄になり、人とできるだけかかわらないでおこうとする態度が、この生き辛い社会を生き抜く作法になったのである。だが「ロック粉碎！」を叫んで、全共闘(?)が会場に乱入するような行動が別に珍しくなかった60年代末期においては、時代の濃密な空気をたっぷりと吸った団塊世代は、《若さとバカさをのびのびと混同できた幸せ》を味わってきたのだ。

団塊世代が味わってきた「幸せ」はもはや消え失せ、下の世代は二度と味わうことができなくなったとすれば、以降の世代からの羨望を裏返した反撥とやっかみが、団塊世代に対して募ってくるのはあまりにも自然であろう。「あの時君はバカだった」と懐かしそうに回顧できる「幸せ」とは全く無縁な以降の世代から、そんな「幸せ」を消失させて窮屈で生き辛い繁栄社会をつくりだしてきたことの責任を問う声が、団塊世代の定年を機に高まってくるのもしたがって必然であった。『ダ・ヴィンチ』創刊編集長であった60年生まれの名園安浩はたとえば、『ダカーポ』(02・10・16)で「学生運

動をした人々の決着の方法」を問うている。このコラムからは、下の世代が「学生運動」というものをどのようにみていたのか、がある鮮明さを帯びて伝わってくる。

《はっきりと思い出せるのは、東大安田講堂から投げ落とされた火炎瓶が炎を上げる一方で、地上から建物に向けて放水が続くといった光景だ。テレビのニュース映像だった。昭和44年の正月を迎えて間もない、夜の茶の間のことだった。当時8歳だった私は、その映像の背景にある政治的、社会的な意味合いなど理解できるはずもなく、ただただ驚きながら食事を忘れて眺めたに違いない。その後も「学生運動」に関するニュースは頻繁にテレビに登場していたのだろう。そして小学生の私も、好奇心に任せて家族にいろいろと訊ねたのだろう。いつしか、「学生運動」は「大学生」が「革命」のためにやる活動なのだと理解するようになっていた。今思えば、6歳年長の姉の影響が大きかったと思うが、それは決して悪いことではなく、あくまでも世の中を善くしていくための行動なのだと信じた。だから自分も大学に行けば、ヘルメットを被りタオルで顔を隠しゲバ棒を持ってデモ行進をするのだ、警察や機動隊と対決するのだと考え、ひとり興奮していた。》

60年安保以降も大きな政治的目標に合わせた街頭デモが日常的に激しく繰り返され、学生の逮捕者は毎回続出し、テレビのニュース映像でも必ず取り上げられた。そのような日常行動と化した街頭デモが、最大の山場として全国動員をかけた羽田闘争や佐世保エンブラ闘争、三里塚闘争において突出する裾野がかたちづくられるなかで、数日間の東大安田講堂攻防戦がこれまでにない最大のクライマックスとして繰り返りひろげられたのだ。下の世代にとっては先のコラムにもあるように、攻防戦のリアル映像は激烈であり、概ね好意的に受けとめられたのが感じられる。おそらくそれは上の世代がやや批判的に辛辣にみていたのとは対照的だったと思う。安田講堂攻防戦がテレビを見る下の世代に想像以上の羨望と昂揚を与えたとすれば、浅間山荘事件はともかく、その後に続く連合赤軍リンチ殺人事件はなんとも形容しがたい陰鬱で暗い衝撃を与えたことが推測される。

《浅間山荘事件が起き、人質となった妊婦の身を案じて機動隊の突撃がはじまったときは11歳だった。中継される現場の攻防をテレビの前でじっと見続け、銃撃に倒れた隊長が運ばれていく光景と山荘の壁を打ち破る巨大な鉄球のうなりが頭の芯にへばりついた。その夜、私は寝小便をした。赤軍派のリンチ殺人事件の全貌が報道された夜も、たしか寝小便をした。夢の中にはいつもヘルメットを被った目しか見えない集団が現れ、狭い我が家を滅茶苦茶に壊し、ついには私にその凶器を振り上げるのだ。腰が抜けて逃げるができない私は、間近に迫った冷ややかな眼を見つめたまま失禁する……。何も寝小便までしなくてもと昔の自身を咎めたくもなるが、その頃、つまり70年代前半になると、「学生運動」は大衆の支持を得ることのない、単なる危険な自家中毒的な行動を繰り返すようになっていた。各セクトの内ゲバ事件が頻発し、爆弾テロ事件も増えていった。時には一般人も巻き込まれて命を落とし、「学生運動」は完全に社会を敵に回してしまった。運動に参加していた若者たちはばらばらとなり、それでも従事する者

は地下に潜った。》

紛れもなく反体制活動であった「学生運動」が東大安田講堂攻防戦でも大衆にまだ好意的に受けとめられていたとすれば、それは反社会的ではありえなかったからだ。浅間山荘の銃撃戦において反体制行動が反社会性を帯びはじめ、連合赤軍リンチ殺人事件で明確に反社会性を露わにしていったとき、反体制運動としての「学生運動」の命脈は尽きたといえる。この凄惨で救いのない事態に最大に衝撃を受けたのは、いうまでもなく当時の「学生運動」に参加してきた学生たち自身であった。年長世代で「学生運動」に共感を示してきた者は口を噤み、当初から批判的なまなざしを投げかけてきた者は「それ見たことか」といった表情を剥き出しにした。では年下の世代はどのような反応を示したのだろうか。そのさまざまのうちの一つがここに示されている。

《中学生になっていた私は、そんな時代状況にもかかわらず、どこかで、「学生運動」をやる自分の将来を夢見ていた。『20歳の原点』を読めば立命館大学を志望し、でも、やっぱり早稲田大学かななどと気楽なことを考えていた。60年安保の年に生まれた自分が、80年に大学で暴れるのは必然だと信じていた。》

高校受験の春休みは中上健次の『岬』を読んで奈良に旅をし、高校最初の夏休みは《文化祭に向けた映画を監督し》、製作を進めていたが、村上龍の『限りなく透明に近いブルー』に衝撃を受けて、《自分が撮っているものがどうにもアホらしくて仕方なくなり、ついには監督を降りてしまった。そして、秋には『ポパイ』の創刊号と出会う》と書き、「学生運動」というものが夢の遠くから目の前の問題として押し迫ってくるのが感じられる。

《すべては「学生運動」がなくなった後の世界だと思った。そもそも運動は「する」ものなのだが、当時の私は「ある」か「ない」かに拘泥していた。なぜなら、物心がついたころから、それは「ある」ものだったのだ。行動方針は明確だ。「ある」ならするが、「ない」ならしない。したがって、私はこの年、大学に行く目標を「学生運動」から「創作修業」にあっさりと変更した。「革命」の響きは相変わらず魅惑的だったが、そんなものは一体どこにあるのか見当もつかなかった。

それからというもの、私は学生運動を回想する人々を軽蔑するようになった。おまえらは、たまたまそういう状況が「あった」から「した」だけだ。もしも、本当にその運動が「する」べきものだったら、その決着をつけずには次のステップに行けないはずだ。なのに、そのほとんどは企業に勤め、大学の先生となり、マイホームを持ち子どもを作り、この時代を生きている。たまさか、団塊の世代で頭数はべらぼうに多いから資本主義の市場対象として重宝がられているだけじゃねえか……罵詔雑言ならまだまだいくらでも出てくる。実際に何度か喧嘩もしたが、それだけに、当時の自身の行動に決着をつけようとしている人には、興味がある。もっと言えば、仄かな畏怖の念すら抱いてしまう。》

筆者は、「ある」からしてきただけの「学生運動」にかかわってきた団塊世代が、戦中派が軍隊体験や戦争体験を懐かしく回想するように、学生運動体験を回想することを軽蔑し、罵詔雑言を投げかける。当然のことだといってよい。学生運動は「する」もの

ではあっても、回想するものではないからだ。回想することができるのは、かつては「あった」学生運動がもはや自分には縁がなくなって、彼方へ遠ざかってしまっていたからである。回想する団塊世代にとっての学生運動は、《たまたまそういう状況が「あった」から「した」だけ》のものにすぎず、遂に「する」ものにはなりえなかったのだ。自分にとって「する」学生運動であったなら、その「する」ことは舞台が大学から大学以外に移っても、さまざまなかたちを取って持続していたにちがいない。なぜなら、「する」という行為自体が「ない」ことを前提にしていたからだ。

筆者は《当時の自身の行動に決着をつけようとしている人には、興味がある》と言う。だから、《早稻田の学生時代に日本共産党系ゲバルト部隊の指揮者として活動した》宮崎学が著作『叛乱者グラフィティ』のなかで、《残念ながら、60年代の運動は総体的に壮なるゼロであったと思う。ゼロであればまだいい。しかし、現在の社会にあるヌエのような全体主義への道を、60年代の運動が水先案内の役割を果たしてしまっただのではないか、という極めて否定的なところに辿り着いてしまったように思われてならない》と書いていることを、《痛切な告白》として受けとめようとする。わからなくはないが、だが「学生運動をした人々の決着の方法」についての不分明さがどうしても残る。《当時の自身の行動に決着をつけようとし》ることは、《当時の自身の行動》を今も生きつづけることなしには不可能だからだ。つまり、《当時の自身の行動》を大学以外の場所に舞台を変えるにつれて、その行動をさまざまなかたちに変換しながら生きることで、《当時の自身の行動》が追求しつづけていた課題と切断されることなく、不断に修正を加えつつ展開していくことが問われていたのである。

宮崎学の《痛切な告白》に言及するなかで、この問題を論じてみよう。彼によれば、60年代の運動は《現在の社会にあるヌエのような全体主義への道》を用意していった点で否定的である。そうだろうか。60年代の運動が用意したのではなく、60年代の運動が70年代以降も持続できなかったことが、《現在の社会にあるヌエのような全体主義への道》を用意していったのではないか。60年代の運動が70年安保を経過してかつての勢いに翳^{かげ}りが見えはじめていたとはいえ、止めを刺したのはやはり72年の連合赤軍リンチ事件であった。この凄惨な事件の前で活動家の誰もが立ち止まり、沈黙してしまったのだ。自分たちの運動の行きつく先をそこに見たように思いこんでしまったのである。時代の熱気は一気に冷え込み、《運動に参加していた若者たちはばらばらとなり、それでも従事する者は地下に潜った。》

60年代の運動は宮崎学がみるように、直線的に《現在の社会にあるヌエのような全体主義への道》と繋がっているわけではない。そこには連合赤軍リンチ殺人事件という決定的な断絶線が敷かれていた。その断絶線を抜きにして60年代の運動について論じることはいかならない。視力を徹底させて振り返るなら、60年代の運動と連合赤軍リンチ殺人事件とは本質的に別物であった。いいかえると、60年代の運動の延長線上に連赤事件は位置づけられなかったのである。前者はノンセクト主体の運動であり、後者は6

0 年安保以降のセクト主体の運動であったからだ。したがって、連赤事件はセクト運動の自滅ではあっても、全共闘運動の自滅を意味しているわけでは全くなかった。もっとはっきりと言えば、全共闘運動がセクト主体の従来の運動の壁を乗り越える意図をもって自然発生的に組織されてきたことからすれば、セクト運動の自滅の頂点にある連赤事件から致命的な打撃を与えられることは本来的には起こりえなかったのだ。しかし、連赤事件はセクト運動のみならず、60年代の運動そのものに対しても深刻な影響をもたらしたかのようにみえた。

もう少し簡潔に整理してみる。60年代の運動というものが、60年安保を闘った運動の流れを継承する各セクトの政治的なスケジュール闘争によってかたちづけられたことは明白である。だが、60年代の運動は各セクトに主導されたわけではなかった。60年代の運動がノンセクト・ラジカルとしての全共闘運動に引き絞られていったとき、運動がノンセクトの全共闘運動とセクトの政治運動とに分化されていったわけではなく、ノンセクトとセクトが混在しながら補完し合うようなかたちで大学闘争が展開されていたことを見落としてはならない。セクトだけでは一般学生を基盤とする大学闘争を担うことはできず、政治の領域にはけっして収まりきれない 知識・学問を対象とする領域 を舞台とする大学での闘争には、セクトからはみだす一般学生が活動の中心に躍り出る余地が不可欠であった。全共闘運動はセクトとノンセクトが対立することなく、補完し合うなかから生みだされ、対国家権力闘争に収斂していきかねないセクト運動を超える広範な層を獲得することによって、全世界的な規模の闘争として繰りひろげられていったのである。

《60年安保の年に生まれた自分が、80年に大学で暴れるのは必然だと信じていた》と先に書かれていたように、全共闘運動は「大学」を舞台としており、大学闘争を離れては存在しえなかった。だがその大学闘争も東大安田講堂攻防戦を境に、各大学で機動隊学内導入を背景とした闘争圧殺が進行して、全共闘運動は追い詰められていった。大学を闘争の舞台とする全共闘運動の持続の根拠をどのようにかたちづくっていくかが、活動家の一人一人に大きく問われていたのだ。その時点で全共闘運動を担っていたセクトグループは離脱し、本来の対国家権力闘争を目指して闘争の舞台を大学から市民社会へと移し、武装闘争に活路を見出していった。浅間山荘事件 - 連合赤軍リンチ殺人事件はセクトの武装闘争路線の帰結であった。しかしながら、全共闘運動に結集してきたノンセクトの一般学生は、セクトのように闘争の舞台を大学から他の領域へ移すことができないまま、低迷と沈滞を余儀なくされていった。

したがって、全共闘運動に集約される60年代の運動は連赤事件に敗北したのではなく、自らが展開してきた大学闘争の行き詰まりを打破しえないことによって敗北したのである。連赤事件は全共闘運動が直面している困難な状況をより一層困難に至らしめただけでなく、それ以上にその困難な状況を打破する個々人の主体的なエネルギーを奪い取っていった。一言でいえば、60年代の運動は60年代の枠組みを突き破ることがで

きなかったのだ。セクト運動が行き着いた連赤事件の深刻な影響を跳ね返すほどの現実的な構想も持てず、エネルギーもパワーもつくりだすことができなかったのである。60年代の運動の坐礁はそれ以降の社会の根底に不全感を植え付け、その不全感を振り払うことができないまま、《現在の社会にある又工のような全体主義への道》になだれ込んでいったと考えられる。

《当時の自身の行動に決着をつけようと生きている人に》興味を持つ筆者は、02年7月31日に逝った反帝全学連委員長藤本敏夫が自然農法に取り組んでいたことや、同年9月1日に亡くなった安田講堂攻防戦時の行動隊長今井澄が参議院議員となつて医療制度改革に邁進し、《東大闘争の原点に立ち返って、日本の医療をよくするために再び闘いたいと思います。ともに同志を募ります》と、ガン治療中の同年4月に呼びかけていたことを取り上げる。もちろん、「学生運動をした人々の決着の方法」を示した一つの事例として評価しているのだが、その評価に疑問が感じられなくもない。自らの学生運動体験を回想する連中や、《当時の自身の行動》と裏腹な行動を取って今を生きていることに気づこうとしない者たちと比較すると、彼らが自然農法や医療制度改革を通じて《当時の自身の行動に決着をつけようと生きている》点でははるかにマシと言えるかもしれない。だがそれでもやはり疑問は募って止まない。

なぜ、自然農法なのか、なぜ医療制度改革なのか。少なくとも60年代の運動というものは、自然農法や医療制度改革に行き着かない、茫漠とした可能性の果てしない拡がりや垣間見せていた。一つのテーマに絞り込めない、押し込むことのできない多面性を孕んで、60年代の運動は突出しつつあったのであり、当時の闘争に立ち会った者からすれば、自然農法や単なる医療制度改革に結びつくには運動の矮小化は免れえなかった。自然農法や医療制度改革の枠組みで切り取られていくなかに60年代の運動を覗き込むことはかなり困難であり、その困難さが《当時の自身の行動》を引きずって生きていくことの困難さを逆に浮かび上がらせていたにちがいない。一体どのようにして生きていくなら、《当時の自身の行動に決着をつけようと生きている》ことになるのか。なにもかもが空を掴むような状態のなかで、自分のなかに今も息づいている《当時の自身の行動》からの問いに突き上げられて生きるかどうかが問題の分かれ目であった。

団塊世代に対する批判や怨嗟の声は結局のところ、激動の60年代を生きてきた痕跡がその後の生き方に全く垣間見られないどころか、裏腹の処世が剥き出しにされている醜悪さに帰因しているのが感じられる。『ダカーポ』(04・6・2)は、定職退職までのカウント・ダウンに入った団塊世代が下の世代から、来たる高齢化社会の申し子のように“お荷物”扱いされ始めつつある声を特集として拾い集めている。「団塊の世代」という言葉の名付け親である35年生まれの堺屋太一は、団塊世代が日本社会に与えてきた影響についてこう語る。

《「団塊の世代が通り過ぎた後には常に風が起こります。学生時代には学園紛争が起こりましたし、団塊の世代が就職した70年前後は景気がよくなりました。さらに、結婚

して子どもができニューファミリーとなった70年代後半には住宅ブームが爆発しました。さらに、この人たちが管理職になった頃は、世の中に管理職が猛烈に増えました。そしてこの管理職が張り切ってしまったものだから、バブル経済になってしまったのです」

団塊の世代が管理職となった当時、わが国の成長スピードは抑えるべきだ、わが社の拡大は止めるべきだ、と言ってくれたら、バブル景気にはならなかつたらうと堺屋さんは言う。

「しかし、団塊の世代は競争意識もあつたし、企業に忠実でした。団塊の世代が育った拡大志向の世の中、成長志向の日本をそのまま継承したのです。そうして大量の管理職が頑張ってしまったことが、バブルを引き起こしたのです。これがバブルの正体なのです」

更にもう一つの責任についても、「それは、自らの市場化に失敗したことです。本来、団塊の世代がマーケットになって、新しい中高年産業を興すべきだった。しかし、バブルの土地ブーム、住宅ブームで止まってしまい、そこから先の自分たちの楽しみ、誇りを見いだそうとしなかった。なぜなら、団塊の世代は常に供給者だったからです」と指摘し、加速される《日本社会の高齢化》を見据えて、「お金も経験も知識も時間もある。今こそ、団塊の世代は、これまでしなかったことをしなくてははいけません。それは、好きなことをすること、楽しみの追求です。今までは会社が正しい、と生きてきた。これからは、自分が正しいと思う生き方をすること」によって、「団塊の世代は、高齢者が自分の楽しみを追求できるような産業を次の世代に残していくことが求められています」と提言する。

「これまでしなかったこと」をするような生き方を可能にするためには、団塊世代はどのようなことをしなくてはならないのかがその前に問われてくると思われるが、下の世代からの批判はもっと手厳しい。以下に羅列してみる。

《団塊の世代は、フランスでは社会党の再建、ドイツでは環境保護をテーマにした緑の党の政治進出を担いました。日本では、団塊世代が政治に登場したのは、89～90年頃、社会党の土井委員長の下で行われた選挙で、多士済々な元全共闘の団塊の世代が現れました。私は「彼らは、きっと暴れてくれるに違いない」と期待していましたが、そうはなりませんでした。なんだか、90年代半ば頃から、全共闘世代は、体制に順応してしまったように思います。全共闘世代は、流れに乗る世代だと言えるんじゃないですか。人数も多いし、流れに乗って、周りと同調して行くのがスタイルなんでしょうね。

大学入試粉砕闘争はやるんだけど、自分はちゃっかり卒業して就職してしまっている。》
(直後世代・保坂展人、55年生まれ)

《団塊世代は、右も左も、国家だ、党だ、と大いなるものに寄りすがる腰抜けばかり。既成図式に寄りかかり思考停止に陥る輩しかいない。

団塊世代の政治手法は絶対反対を叫び、集会やデモで交通を渋滞させ、役人や政治家に「やけに道が込んでるなあ」と呟かせるだけ。叫ぶだけじゃ気が晴れても社会は変わらない。むろん残酷な痛みを苦しむ当人なら叫んで当然。でも団塊世代は当人ではなく

単なるサポーター。真剣に救いたいなら叫ぶだけでは許されない。要は、利他のフリをしたエゴイストなのです。

ロバート・ケネディは「真の理想主義者は現実主義者だ」と言った。魂が熱ければ熱いほど、素朴な手法に短絡せず、よく学び、リソースを蓄積し、敵と取引し、現実を確実に変える。団塊世代は能天気な精神主義で、戦略的行動の重要性を知らない。だから、ぼく自身がロビー活動で政治を動かそうとすると、役に立たないのです。ノリだけで思考停止し、観察力と反省力に由来する創意工夫を欠く彼らには期待できない。せめて足を引っ張るのだけはやめてほしい》（新人類世代・宮台真司、59年生まれ）

《団塊は、団結みたいなもので世の中が動くと思われているように見えます。ぼくは、個々が自分なりに考え、自分の意志で幸せになっていくことが世の中をよくすると思う。だから、話し合っても意味がないと思うんです。（以下略）

でも、もし自分が学生時代の設定を選べたら、団塊の人たちの頃の学生時代を生きみたいという気がします。大学にバリケードなんて、少なくとも学園祭より楽しそうだし、それで世の中を変えようと信じられていた純粹さと熱さがうらやましい。それを30歳や40歳になってやっていたら「バカかな」と思いますが。団塊の世代はそういう思い出があるから、団結すれば何かできる、と思うのかもしれないね。》

（バブル世代・小林キユウ、68年生まれ）

《団塊の世代は、若者文化、ユースカルチャーのようなものが日本で初めて大々的に導入された第1世代なわけですが、この世代は「いつまでもオレは子どものままでいるよ」みたいな感じがあると思います。でも、みんな年は取りますから、そう言われてもこちらは困ってしまうかな、と。それは特定の人の問題ではなく、一般的に団塊の世代の、特にマスコミの人たちに感じる。妙に説教くさいんだけど、自分は成熟を拒否している、というようなポジションにいる方々が多いように思います。

例えば、文芸評論などでも個としての感覚から文章を書く、というスタンスを崩さず、文学とはこうあるべき、というような書き方はしない。それが団塊の世代の倫理なのだと思います。でも、文学全体が沈没しているようなときは、誰かが、文学はこうあるべき、と言わなきゃいけない。でも、そうした責任を取る人が、団塊の世代からは出にくいかもしれません。》（団塊ジュニア・東浩紀、71年生まれ）

「高い給与、リーダーシップなし、年金食いつぶし」の“お荷物”、団塊世代に対する風当たりは『ダカーポ』の同特集号に満ち満ちている。『老ゆる団塊』の著者で経済ジャーナリストの岸宣仁は、《ポリティカルな人たちも、ノンポリティカルな人たちも「社会が変わるのではないか」という期待を抱き、その高揚感に一生のエネルギーのかなりの部分を消費してしまった》「燃え尽き症候群」に陥り、「学生時代に燃え尽きてしまっている」ので、就職してからは、出る杭にはならず、戦うことなく調整型として生きてきたが、「情報通信の発達、つまりインターネットが発達して、部下たちが中間管理職の頭越しに経営幹部に意見具申することが可能になりました。情報の中抜き、つまり中

間管理職の中抜きが起こった。これが、団塊世代が中間管理職になった頃に起こり、リストラの対象になる可能性を高めたように思うのです」と語る。

単なる「調整型」の管理職は企業内ではもはや求められず、《自分の意見を持ち、新たな市場を開拓するようなアグレッシブなタイプが求められているのだが、団塊世代には見当たらない。》そんな団塊世代の定年後については、《年金をしっかりともらい、二度と戦うことなく幸せな余生を過ごすのか》と、記事は揶揄する。ポスト団塊世代で経済学者の金子勝は団塊世代のリーダーシップのなさについて、「団塊の世代がこれほどヒドイのは、日本だけではないでしょうか。アジアの政治家を見ても、インドネシアのメガワティ大統領、フィリピンのアロヨ大統領、韓国の盧武鉉大統領、米国のブッシュ大統領など団塊の世代が活躍しています」と嘆く。そうなった原因をこうみる。「60年代末の全共闘運動は、結果的にはお祭りにすぎなかったということでしょう。その後の文化に何も影響を残さなかった。ドイツでは徹底的に戦争責任を追及し、上の世代を追い落とし、環境など新しい価値観をつくって行きました。米国はヒドイものだけでもベトナム戦争があった。いずれもゆるぎない経験があり、社会を建設的な方向に向わせようとするエネルギーがある。日本では、お祭り騒ぎをし、ただ群れていただけなんです。それが今になって分かった」

“お荷物”、団塊世代はジュニアをも、《再びお荷物世代に育ててしまった》のではないかと指摘するのは、社会学者の岩間夏樹である。「団塊の世代は、優秀な企業戦士として身を粉にして働いて、ようやくたどり着いたのが郊外のニュータウンに建てた一戸建てです。ジュニアたちは、出発点がニュータウンであり、豊かさの感覚が全く異なるんです。団塊の世代の親たちは『子どもたちには不自由な生活をさせない』と願い、その願い通り、飢えを知らない世代が出現した」が、そのジュニア世代は親の姿を見て、結婚もしないフリーターを続ける生活価値観を持つに至ったと言う。「上昇志向の団塊の世代の親たちは、平日は仕事、土日は接待ゴルフという日々。時折、酔っぱらうと『自己とは何か……』と話し始める。つまり、言うことと、やることが違うとジュニアたちは感じているわけです。そこで子どもたちは『経済的、社会的地位より、自分らしく生きて行きたい』という生活価値観を持ったのでしょうか」

この「団塊世代」特集号には、同じ47年生まれで共に早稲田大学出身の作家立松和平と漫画家弘兼憲史が、インタビューに答えて語っている。「当時は、いろんなことを考える時代だったんです。既成のものをそのまま受け止めないで疑問を持つ。例えば、ぼくが最初に入っていたキャンパス新聞会は客観中立報道を標榜していたけど、客観中立報道なんて本当にあるのか、という大議論になって分裂してしまったくらいに。一つひとつのものを突きつめて点検していく時代だった」と前者は語り、「社会を変革したいという気持ちが強かった。差別のない、富の分配が正しく行われる開かれた社会に変革したい、と夢見るようになったんです」と、当時の運動にかかわっていた学生たちの心情を振り返る。

一度も学生運動に参加したことはないと言う後者はその理由について、「ぼくははっきり言って、社会主義が嫌いでした。その当時は文化人やマスコミも大半は左よりで、社会主義的な改革を良しとした時代。反左翼的なことを言おうものなら袋だたきに遭いそうな雰囲気でした」と説明し、アイビールック、ボタンダウンにローファー、チノパンというナンパ人間として、学生運動の推移を次のように観察している。

「4年生の後半になると、運動に参加していた人たちもみんな就職しましたね。純然たる社会主義が正しいと思って運動していたかという、そこまでの頭は学生にはなかったはず。だから、彼らが大企業に就職したといっても、今で言えば、染めていた髪を黒色に戻して就職するようなものです」

前者が全共闘運動に寄り添うようにして言葉を発しているなら、後者は全共闘運動に反撥して突き放すような見方を一貫させている。前者が言うように、「当時は、いろんなことを考える時代」で、「既成のものをそのまま受け止めないで疑問を持つ」傾向にあったから、後者がみるようには、「社会主義的な改革を良しとし」て、既成の社会主義を目指しているわけではなかった。もし当時の学生たちが社会主義を目指していたなら、それは現存する世界の「どこにもない社会主義」であった。「社会を変革したいという気持ちが強かった」割には、変革すべき社会をどこかで支えている自分自身をも変革したいという気持は薄かったし、^{すく}変革の方向性も漠然としていた。すべてが茫漠としている分、現実からの拘束に足を掬われていきやすく、「4年生の後半になると、運動に参加していた人たちもみんな就職し」ていった。だからといって、「染めていた髪を黒色に戻して就職」したとみる見方は皮相にすぎる。

自分たちは学生運動にかかわっていなかったから、堂々と就職できるけれども、反体制を叫んだ彼らが体制側の会社に就職することはおかしいとみる見方こそが、おかしいと言わなければならない。反体制を叫んだ者も叫ばなかった者と同様に、堂々と就職しても構わないのだ。反体制を叫んだ者の就職に疑問を感じるなら、それ以上に反体制を叫ばなかった者の就職にも疑問を感じなくてはならない。反体制を叫ばないところでの就職に対する疑問に直面していないからだ。問題は反体制を叫んだ者の就職にあるのではなく、反体制を叫んできたことがどのように就労を潜り抜けてきているか、にあったにちがいない。反体制を一度も叫んでこなかったような顔つきで会社に居座りつづけることにおいて、彼らは批判に甘んじなければならないのである。

前者も言うように、団塊世代でも全共闘運動にかかわった者はごく少数であったし、学生全体からみても《学生運動に参加したのは少数派だった》が、問題は多数が少数かにあるのではなく、運動に参加した者も参加しなかった者も等しく、60年代の運動が惹き起こした状況に対する責任を負っていたところにある筈だ。そのことに気づこうとしないとかたちをとって責任を負っていたのである。団塊世代に問われているのは、自分たちが気づこうとしなければ気づかなくても済まされるような生き方にあまりにも馴れ合ってきた点にあるにちがいない。

2006年5月1日記